

盆栽の図像学

はちうえ

第三十三回 歌川国貞《子宝遊》

解説／田口文哉

浮世絵にみる江戸・明治の盆栽



歌川国貞《子宝遊》
大判錦絵 36.9×22.9cm 文化12年（天保13年）（1815～42）
版元／森屋治兵衛 さいたま市大宮盆栽美術館蔵

浮世絵師紹介

歌川国貞（うたがわくにさだ）（1786～1864）
数多い浮世絵師のなかでも最大級の作例を残した江戸時代末期の絵師。はじめ歌川国貞と名乗っていたが、その後当時の人気絵師の一人であった師匠歌川豊国の名を継いだ（本人は二代目と名乗っていたが、実際は三代目であった）。庶民が鉢植を楽しむようになる時代に活躍した浮世絵師であり、多くの鉢植が彼の浮世絵版画に描きあらわされている。

シリーズのうちの一点である。

座敷では女性が天井から下がった紐で、私にも幼い頃の記憶に少しはあるのだが、今や懐かしの風物となった蚊帳（かや）を吊っているところである。季節は夏、やや胸元がはだけた女性の着物が赤、青咲き分けの朝顔の紋様であることも、この季節を物語る一要素であるだろう。また、女性の足元には子どもがしがみついている。題名との兼ね合いからも、この二人はおそらく親子と見るべきだろうが、どうしてこの子どもは、庭先から逃れるようにして母の足にしがみつき、空を振り仰いでいるのだろうか。それは、画面左から座敷にまで入り込むように、朱色の鋭い筆線で描かれた稲光に驚いているためである。蚊帳を張る夕暮れ前にとどろく雷、その轟音や稲光の凄まじさを、絵師は空から部屋にまで達する一本の線で見事に表現しているのである。まさに夏を象徴する情景が、この絵の興味の中心となっているのだ。

こうした夏の一般家庭のひとつに、いかにも置か



参考図版 文浪《おきな遊び 七小町 清水小まち》
享和期頃（1781～1800）、公文教育研究会所蔵

れていたように添えられているのが、青竹で組まれた縁側の端に描かれた水盤である。その色合いからおそらく木製かと思われる脚付きの水盤は、内部が黒く塗られていることから、耐水のために漆掛けされているようである。そこに水が張られ、左右に分けて据えられた大小の石に草が植えられて島のような姿となっている。興味深いのは、その石の間が砂州のように砂か石でつなげられて、島が陸続きになっている点である。さらに左の大きな島にはミニチュアの建物が2点配されて、どこかの実景を映すかのような箱庭となっているのである。

水盤上の水、石、そして緑が映し出す涼やかな山水景の箱庭は、庭先に水をまく打水と同様に、実際的な冷却効果も期待されただろう。しかし、なにより絵を見て想像するだけでも涼しさを感じるように、気持ちの上で涼やかさをいざなう江戸の人々の生活の工夫を、このひとときの描写に見ることができ

「水出し」からくり

ここで見逃してはならない図像がある。なにより本図の題名「子宝遊」が指し示す、子どもの遊びを伝えるおもちゃが描きこまれているのである。先ほど見た水盤の上の方に水をたたえた大きな染付鉢が見えており、そこから下に掛かるようにして、いくつかの四角い柵に筒状の管が差し込まれて連結された、縦に長い組み物が柵とおそらく竹製の管

夏の清涼感

本年もまた猛暑到来。盆栽愛好家の多くは、その鉢数にもよるだろうが水遣りに明け暮れていることだろう。特に昨今の猛暑は盆栽に深刻なダメージを与えかねない。私の勤務先である大宮盆栽美術館の職人が夕方につぶやいた、今日の仕事は水遣りで終わったということばが印象に残っている。

しかし暑い盛りの中でも、ふとした時に目をとめた青葉の繁りや陰影は、私たちの意識をひととき奪っていく。いかに熱気が周囲に立ち込めようと、ひと心地つかせてくれるような安らぎを木々は与えてくれているようだ。浴衣やうちわ、水がめの中の金魚など、夏の清涼感を演出する道具立ては数あれど、静かに佇む木々や草の姿もまた、夏には欠かせない二服の涼と言えるだろう。今月は、このように青葉の涼感を演出する盆栽を生活に取り入れた、江戸の人々の夏を描いた浮世絵を紹介しよう。そして、夏ならではの話題と言え、子どもたちの水遊びのおもちゃが描きこまれていることを併せて見ていきたい。私たちが今だからこそ見習いたい、水や緑を巧みに取り入れた豊かな生活が江戸にはあった。

夏の日のひととき

本図は「子宝遊」と題された一枚で、子どもたちの遊ぶ姿やそのおもちゃなどを主題として、同名のタイトルのもとに制作した

で作られているこの不思議な物体が何であるか。これを知るために、本図と同様に子ども遊びを主題とした参考図版を見てみよう。

「おきな遊び 七小町 清水小まち」（公文教育研究会所蔵）と題された参考図版にも、本図と同様の組み物が描かれている。この図を見れば、この仕掛けがどのようなものかわかることだろう。いわゆる「サイホン」の原理により、高い台上の水を竹筒を通して引き落とし、下の柵から噴水のように吹き上げる仕組みとなっているのである。こうしたおもちゃは「水出し」と呼ばれ、さらにここでは、噴水によつて持ち上げられた玉が竹の坂道を転がって循環するという、手の込んだ仕掛けになっているのである。（くもん子ども研究所・他『遊べや遊べ！ 子ども浮世絵展』NHKプロモーション、二〇〇三年）。

またこの図は、平安の歌人小野小町の七つの物語を語る謡曲「七小町」のうち「清水（きよみず）小町」を見立てている。京都の清水寺に詣でた旅の僧が、音羽の滝の前で思い出した小町の歌「何をして身おいたづらに 老いにつむ（※謡曲では「老いぬらん」） 滝の景色は かわらぬものを」を上部に書き込み、子供が遊ぶ水出しのおもちゃの水流が、物語で詠まれた清水寺の音羽の滝を見立てたものとして描かれているのである（芳賀矢一・他『校註謡曲叢書 二 臨川書店、一九八七年）。

元の「子宝遊」を比較してみれば、水出しの基本形状は同様だが、その吹き出し口のかたちは大きく異なっている。後ろにある植物の緑色と同化して判然としないが、「子宝遊」の吹き出し口には、まだら模様のカガエルが取り付けられているのである。おそらくこれは作り物のカエルで、その口から水が噴き出す仕組みとなっていたのだろう。その水を受ける場所に、山水景の箱庭が置かれているのである。

江戸島の盆景

この箱庭の左の島をよく見ると、山の右上に三重



〈子宝遊〉部分

塔、左下に大きな建築物の作り物が据えられているのを確認できる。砂州がつないでいる三重塔と建築物がある島——この風景をどこかで見たことがある。それを参考図版と比べることで明らかにしておこう。本図と同時期に描かれた歌川貞虎による江ノ島を描いた図がそれだ。江戸時代には既に、江島弁天崇拜とともに観光名所として庶民の人気を得ていた江ノ島（現神奈川県藤沢市）は、多くの図に描かれている。参考図版においても、砂州がつなく島の右上に小さく、明治時代の廃仏毀釈運動で取り壊されることになる三重塔の姿があり、山中腹には連なる社の姿を認めることができる。当時の人々が抱いていた江ノ島の典型的イメージ

ジとは、このようなシンボルがセットになっていたものだったのだろう。これと比較すると、「子宝遊」において母子の生活の場にひっそりと置かれた山水景の箱庭は、江ノ島イメージの最小限のシンボルによつて構成された、実景表現と呼ぶことができるのである。

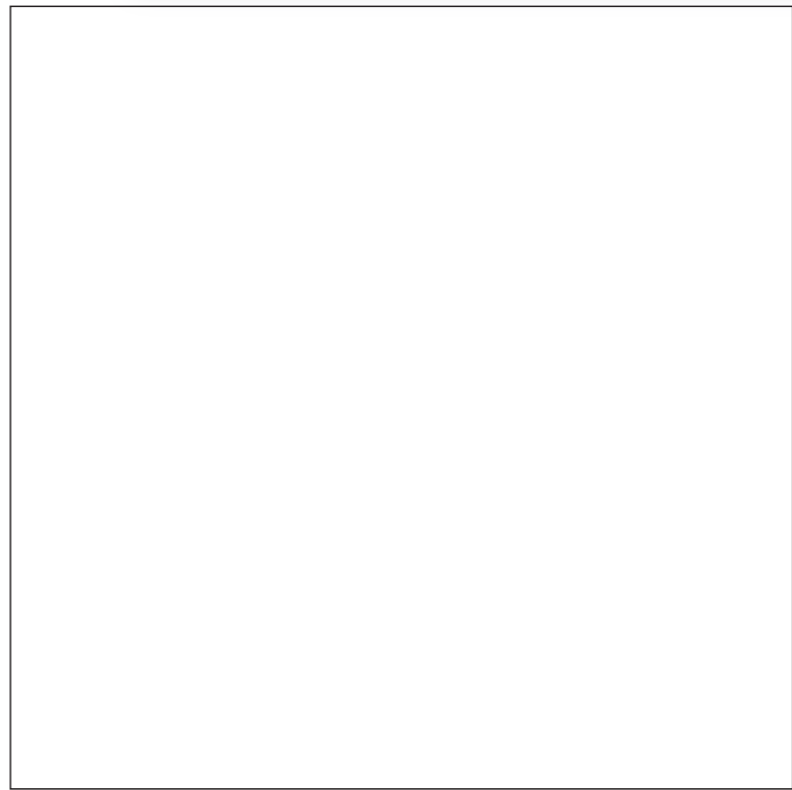
今月紹介した「子宝遊」とは、江戸の人々の典型的な夏の生活をあらわす道具で構成されていないながら、その内容は手抜かりのない重層的な意味を持った図像で表現されていることが明らかとなった。一枚の絵にこれだけの読み解く楽しみがあることを、私たちは改めて教えられたというわけである。（続く）



歌川貞虎（鎌倉七里ヶ浜ヨリ江の島遠見）部分



参考図版 歌川貞虎（鎌倉七里ヶ浜ヨリ江の島遠見）
文化12年（天保13年）（1815）42、
国立国会図書館所蔵



さいたま市大宮盆栽美術館のイベント告知

■「涼風逸品 ～盛夏の盆栽・水石展」

概要：元読売巨人軍のプロ野球選手として活躍された「赤い手袋」のニックネームでも有名な柴田勲さんの愛蔵盆栽や、盆栽家木村正彦さんの創作盆栽など、4名の盆栽愛好家や盆栽家の作品を週ごとにご紹介します。

- 第1週（8月2日～7日） 斉藤弘（愛好家、神奈川県）
- 第2週（8月9日～14日） 木村正彦（盆栽家、埼玉県）
- 第3週（8月16日～21日） 山田登美男（盆栽家、埼玉県）
- 第4週（8月23日～28日） 柴田勲（愛好家、東京都）

会期：平成25年8月2日（金）～8月28日（水） 毎週木曜休館
主催：さいたま市大宮盆栽美術館 会場：コレクションギャラリーほか
■埼玉県さいたま市北区土呂町2-24-3 ☎048-780-2091

著者プロフィール

山口文哉（たぐち・ふみや）
さいたま市大宮盆栽美術館学芸員。
1977年生まれ。2009年、日本大学大学院芸術学研究所博士後期課程修了 芸術学博士。勤務先である大宮盆栽美術館では絵画部門を担当。四季のうつろいにあわせ、盆栽があらわされた浮世絵を展示している。